

【翻 訳】

ウォルター・ドウ・ラ・メアー詩集
『ピーコック パイ』(その3)

野 口 忠 男

夜の飛行

ほうきにまたがり魔女たちが駆ける
三日月の淡い光に照らされ 腰を曲げた黒い影
片足あげ 片足さげ
ひげをはやし マントを着て 頭巾をかぶり
魔女たちが行く
北斗七星の下で鳴きかわす
竜座の下を飛び回る
声をはり上げさわぎたて ぐるりと回転体が揺れる
天の河目指し盲めっぽう突き進む
またたく椅子座の脚の間で
空を舞い飛び鳴き声上げる
するとほのかに光る獅子座を越え
大きなオリオン座のかなたで吠えるシリウスへ飛んで行く
高く舞い ぐるりと大きく旋回すると
銀の光をあびながら家路をたどる

ピーク ピューク

魔法をかけ 揺りかごから
妖精たちは幼い弟を盗み
うぶ着に取り替え子を入れ
かわいそうに母さんをやきもきさせた

その子はろうそくの明かりに照らされ泣き声上げる
ほおはすっかりやせ細り青白く
とても小さな目を開けて
母さんと私に向かって泣きわめく
泣き休むまで
あやしもしないし 世話もしない
妖精たちは情もかけず腕に抱き
呪文をととなえまじないをかけ 弟をさらって行った
この取り替え子が妖精になるまで——
泣きなさい！ 泣きなさい！ 好きなだけ泣きなさい
お前は人間の赤ん坊にはなれはしない！

取り替え子

「おーい おーい！」
からかってみたり 浮かれてみたり——
「おーい おーい
そこの渡し舟の若者よ！」

水辺の薄暗がりの石段に
娘が一人立っていた——
あの取り替え子が立っていた——「おーい！」
娘が若者を呼んだ
彼は緑の波にのってやって来た
灰色の波にのってやって来た
静かな夏の日に
美しい娘が身をかがめている
娘が横木に腰を掛け
ほほえんだ時
若者は彼女の美しい顔に見とれ
夢心地になった
彼がオールをこぐ音は聞えず

二人は静かに漂っていた
首をたれ甘い香の干草を食む
牛の近くを通り過ぎていった
それでも彼らは夢の中
彼は娘の美しさに見とれて座り
舟尾を前に漂いながら
海へ——海へと下って行った

それでは来てごらん 呼んでごらん
たそがれが迫り
あの愛らしい顔に
影を落とすころ
海の向うの薄暗がりに
かすかに鳴り響く音が聞こえるでしょう——
「おーい おーい！」
震えながら消えて行く
「おーい おーい！……」
震えながら消えて行く

からかう妖精

「ジルおばさん どうして窓から顔を出さないの？」
庭でこっくりこっくりしながら妖精が言った
「ジルおばさん どうして窓から顔を出せないの？」
庭でそっと笑いながら妖精が言った
でもあたりは静まりかえり 桜の小枝も揺れていなかった
人気のない敷居の下につたがはい
妖精が庭で金切り声を上げ からかってみても
ジルおばさんは窓から顔を出さなかった

「かわいそうなジルおばさん あいつらが何かしたの？」
庭で明るく輝きながら妖精は言った

「ジルおばさん あいつらはどこへおばさんを隠したの？」

庭で軽やかに踊りながら妖精が言った
でも夜の薄暗い闇が丘をつつみ
星空の下には水車が静かに立っていた
妖精は庭でからかいはしゃいだ
ジルおばさんは 冷たい家の中から答えてくれなかった

はちみつ泥棒

ギンムルとメル 二人は妖精
人のはちみつをたいらげるのが好きだった
たびたび人がかっているはちの巣に行き
甘いみつを食べ渴をいやした

たそがれが迫り夜になると
二人は薄明かりの中を
いたずら妖精の髪と紅いくちびるをして急いで行った
小さな石のナイフで巣を切りさき
麦わらであんだ巣の中のはちに
聞こえないようにこっそり切り取った
それから賢くて貪欲な親指で
甘いみつの巣をむさぼり食べた
すると眠そうな声で 雄蜂が仲間に行った
「冷たい冷たい風が吹き込んで来る」
すると女王蜂は驚いて
皆の顔を見まわした
それでもくしとブラシを持った女の働き蜂は
くしけずり なだめ ささやいた 「静かに！」
巣の中を金切り声をはりあげて
あちらへこちらへ飛びかいながら鳴いていた
二人の泥棒は木の下で
蜜蜂をあざ笑いからかっていた

怒ったすずめ蜂のようなどなり声が
べとべとねばる齒からもれていた
ギンムルとメルは
むしゃむしゃ ちゅうちゅう がぶがぶ おなか一杯食べ終わると
一番鶏が鳴く前に
彼らは妖精の塚へ帰って行った
薄明かりの空のかなたに
かすかな淡い姿をした泥棒たちが消えて行った

足長おじさん

足長おじさん——彼は「おーい！」と大声で叫んだ
深い谷間を越えて
鋭くかん高く響きわたった
澄んだ緑の暗がりをはけて響きわたった
そこでは妖精たちが糸をつむいでいた
白い木の精が目を上げ
雨のようにかぐわしい
森の空地で聞いていた
うさぎが仲間のところへやって来た——老いたうさぎが
わらびの中に頭を出して座っていた
一羽のつぐみがさえずっていた「私はここ 私はここ！」と
内気な仲間にはっきり聞こえる声で
そこに足長おじさんが股をひろげて座っていた
か細い「おーい！」の声か
遠いこだまとなって震えながら帰って来るのを
聞いていた

魔法にかけられて

今夜一人の女性
しなやかな あでやかな ほっそりした女性が

私を呼んだ—— ヒースのむこうから呼んだ
夕暮れの薄暗いぶなの大枝の下で

今夜一人の女性の後を追って
遠く寂しいところまで行った
狐やまむしやいたちは
二人が歩いた道を知っている

私は正直そうな顔の人たちと夕食を取る
パンの皮をこなごなにする
何時間も語り続ける
ゆっくり気どった長話には加わらない

破風の下の私の部屋へ帰りたい
月がくぼんだ静かな明るい
荒地の向うから窓格子に
光を降り注いでいるだろう

月は魔法使いの女性を照らし
喜んだり悲しんだりするだろう
ずる賢い指で私の心を奪い取った人は
夢の中で私を呼ぶ

小さな深い谷間で私をダンスにさそい
人間の心を奪い取った人は
私を取り替え子にして母さんへ送った
私の家族には不思議な子

メルミロ

森のにわとこの木に
33羽の小鳥がとまっていた

メルミロが呼んだ—— 3羽が飛び去り
木に 30羽が残った
メルミロが呼んだ—— 9羽が去り
大枝に 21羽がいた
メルミロが呼んだ—— 18羽が去り
3羽が頭を動かし 羽を整えていた
メルミロが呼んだ—— 3羽—— 2羽—— 1羽
今どの小鳥にも仲間がいなくなった

細い体のメルミロが
暗い緑の森へ入って行った
細長い両手を広げて
静かに不思議な踊りのステップを踏んだ
彼女にはさえずりまわる小鳥の
声が聞こえなかった
小鳥がみんな飛んで来て
彼女の胸のくぼみで休んでいた
森で—— いばら にわとこ 柳——
メルミロは一人で踊った—— 一人で踊った

木

美しい国のいたるところ
英国に育つ木の中で
とねりこ すばらしいとねりこは
緑の葉を激しく燃やす

海から海へと
英国に育つ木の中で
とても愛らしい柳の木は大枝を
強い雨のもとでしのらせる

古来の乳香や没薬

英国に育つ木の中で
しなの木やひのきのように
花や煙の香を放つ木はほかにない

オーク にれ いばら

英国に育つ木の中で
いちいだけが荒れ果てた木々のために
平和の灯火を燃やす

銀

今ゆっくりと 静かに月が
銀の靴をはき 夜を歩く
こちらをのぞき あちらを見つめ
銀の木に銀の実を見る
銀色のわら屋根のもとにゆれる光を
ひとつひとつ窓がとらえる
小屋に丸太のように横たわり
銀の足した犬が眠る
暗い小屋から銀色の羽にくるまり眠る
鳩たちの白い胸がのぞく
銀の爪と銀の目をした
かやねずみが一びきさっと走って行く
水の中で動かず魚が光る
銀の流れの銀のあしのほとり

誰も知らない

つたのからまる果樹園の壁のあたりに
私はしばしば風のささやきを聞いた
闇夜に木々の葉を渡り

ため息まじりに呼び声を上げ
静かに消えて行く
私は床の中で
まどろみながら 目覚めながら
風のささやきを不思議に思った

風の正体は誰も知らない
高い空の下
無数の星が遠く離れて住み
風波が吹き抜けるところ
高い波のような空気
海の葉をゆさぶり
私を包む
屋根の軒下で泡立っている

私達は深い海の底に住んでいる
私達はみんな 獣も人間もあの世へ行く時には
体は砂の下に埋められる
魚のように貝のように去って行く
風に乗り遠くへ飛んで行く
大きな空気の流れに乗って
日の燃えるところへ飛んで行く

いつか？

輝き燃える太陽よ
いつか歩き回ることにあきてしまうだろうか？
白く輝く月よ
いつか愛の光を注ぎ かけることにあきてしまうだろうか？
純金の杖を手に
いつか羊飼いがやって来て
小さな星々をすべて

子羊のように群れへと導くだろうか？

海のかなたから
いつか流浪の人が
河をさかのぼり
墓へ私のもとへ渡って来るだろうか？
その人は私たちをみんな船に乗せ
夢見るように遠くへと
西方の空の島あるところへ
つれて行ってくれるだろうか？

いろいろな音

小さい音——
かすかな音 低い音
あしのささやき
震えているバイオリン
トランペットの響く音
強く震動するドラム
こうごうしく はなやかな 静かな
音が聞こえて来る

小さな音——
緑の葉のそよぎとささやき
ひらひら震えている仲間の葉
オークの葉からオークの葉へと
広く暗く森をぬけ——
水のような揺れ動く世界を越えて
夜の風が行く

小さい音
かすかな音 低い音

煮え立つやかんの
か細く高くうなる音
霜が結ぶ音
針と糸の動く音
母さん 色あせた壁 夢
眠気を誘うベット

さまよう惑星

夜の草地は広く
ひな菊が輝き
愛らしい露が揺れ
ぴかぴか光り美しい
かぐわしい草原に行く
星々の間をさまよう惑星——
金星 水星 天王星 海王星
土星 木星 火星

銀色に装い 惑星は動く
回転しながらささやき語る
私たちのさまよう
喜びの花咲く草地は美しい

秘密のうた

美はどこへ行ったの？
消えてしまった 消えてしまった
かすかに悲しい声をあげながら
冷たい風が運び去っていった
白い星たちが美をはらうと
震えながら
路なき海の深みへと沈んでいった

消えてしまった 消えてしまった
美が私のもとから消えてしまった

葉を落としたきれいな花が
色あせ枯れている
緑の葉をつけた柳は
頭をたれ
小川へかかる影なす枝へ
低い声でささやきかける
夢のような不思議な
美をなげきながら

兵士のうた

凍った土手に ぼんやり座り眺めていると
光るはがねのやりを持ち 一人の兵士がやって来た
日の光に照らされて幽霊のような姿でやって来た
後ろでは海がとどろき ざわめいていた

ぼんやり座って眺めていると 一人ではなく
十人の兵士がやって来た
幽霊みたいな兵隊が 列をなし沼地を越えてやって来た
もやの中を行進する兵隊は 夢で見るようなものだった
後ろでは海が叫び ぐだけた

ぼんやり座って眺めていると 大ぜいが黒い衣装をつけていた
馬をつれ大砲を車にのせ戦へと向かっていた
影のように運命へ突き進むつわ者は 耐えなければならない
後ろで海が太鼓のようにとどろき トランペットのように鳴り渡った

みつばちのうた

動物園のしま馬が
行くばらには
何千本ものとげがある
光沢があり しまがあり ふさふさの毛
この馬は動物園に住む
妖精の王女さま

動物園の茂みで
育つばらには
花がいっぱい咲いている
動物園の王女さまの
しま馬は呪文をとねえながら
草を食む

美しく思いのままに
育つばらの花を
みつばちはかぎわける
黒く慎重な目をして
妖精をさがす
みつばちの知っている妖精のばらは
みつをふくむわけでない
遠く離れた動物園の
王女さまをなぐさめるため
甘いかおりをかぐだけだった

魔法のうた

魔法の歌をあそこで歌った
緑の——緑の森 澄んだ池のほとり
言葉が浮かんでくるままに

私は原始の森の木の下で歌った
野の鳥が飛び交うのを眺めていた

こんもり茂った緑の枝の下にいと
深く濃い青空には雲一つ見えなかった

たそがれが迫り 静寂が訪れてきた
夕暮れの銀色に燃え立つ惑星
暮れ行く小路を私はさまよい
露のしずくでふるえる茂みを通って行った

一人座って歌った音楽は
消え言葉は去った
幾年もの歳月が私にめぐって来た ——
森と池とにわたこの木に

夢のうた

日の光 月の光
薄明り 星明り
一日の終わりを告げるたそがれ
鳴くふくろう
つめたい露
オークとさんざしの森のなか

ランプの明り ロウソクの明り
たいまつの明り 明りなし
夕暮れ時の暗やみ
ほえるライオン
あふれ出る怒り
はるか遠くの荒れはてた原野で

妖精の明り こうもりの明り
朽ちた木の明り ひきがえるの明り
海はちらちら光る灰色の暗がり
ほほえむ小さな顔
気晴らしの夢のなか
遠く離れた不思議な国

影のうた

か細い弦をかき鳴らせ 音楽家よ
ほっそりとした長い手で
星のようにろうそくは輝き燃え
時計の砂は静かに落ちる
老いた獵犬は寝ながら鼻を鳴らし
燃えさしはかすかにくすぶっている
影が壁を横切り
やって来ては去って行く

弦をそっとかき鳴らせ 音楽家よ
瞬間は積もり時間となる
風の吹き付けない窓に霜がはり
迷路のような花園が出来る
幽霊は暮れ行く空中をさすらい
開かれた戸口に来て耳を傾ける
音楽家が彼らを呼び寄せたのだ 夢見心地に
我が家へもう一度

気ちがい王子のうた

誰が言ったの「くじゃくのパイ？」
年老いた王がすずめに向って
だれが言ったの「作物は実っている？」

さびがまぐわに向って
誰が言ったの「彼女は今どこで眠っている？」
彼女はどこで頭を休めている
宵の美しさに浸って？」——
これは私が言ったこと

誰が言ったの「母さんの言いつけは？」
寺男が柳に向って
誰が言ったの「緑は夢にかけり
苔はまくらにかげる？」
誰が言ったの「彼女は狭いベットののために
すべての時の喜びを持っている
人生の悩みの泡ははじけてしまったの？」
それは私が言ったこと

終わりのうた

あらゆる時代の崖っぶち
一人の騎士が馬にまたがっていた
甲冑は赤くわずかにさびついて
魂は深い悲しみから解き放たれていた
彼はやせこけた顔から
面頬を上げた
すると馬は首をまわしいなないた
そこに立っていたのは二人だけ

険しい時間の流れを越えて歌う小鳥は一羽もいない
長い間の冒険の歌を
風はやんだ
一休み
「終わりに向う寂しさ！」と騎士は馬に向って叫び声をあげ
懸命に引いていた手綱をゆるめた——

挑戦のため宇宙へ向って突進した
後には静けさが残っていた